

風邪に効く薬 広報げろ 2020.1

風邪に効く薬

風邪症状を引き起こす原因の90%前後はウイルスです。普通の風邪(＝感冒)とインフルエンザの違いは、感染力や症状の強さなどで、原因がウイルスであることには変わりありません。

インフルエンザは流行すれば社会に大きな影響を与えるためにワクチンや抗ウイルス薬が開発されています。この開発にかかる費用は莫大ですが、社会的要求もあり、採算が取れるとして企業も開発に力を入れています。そのほかの風邪ウイルスは100種以上ありますが、症状も軽いことが多く採算が取れないのでワクチン開発は遅れています。また、ウイルスは年々変化(変異)するのでワクチンの効果にも限りがあることも開発困難な原因となっています。

インフルエンザに効く薬は、インフルエンザウイルスが体の中で増えるのを抑える働きを持っています。薬が働いている間に体内でインフルエンザウイルス抗体が作られ、ウイルスを撃退します。この薬は特定のインフルエンザウイルスにしか効果がありません。そのため病院でインフルエンザかどうかを検査する必要があります。

いうまでもなく抗生物質はウイルスには効きません。細菌が増えるのを抑える抗生物質はウイルスを抑える手段を持っていないからです。不必要な抗生物質の投与は腸内細菌叢^{そう}の環境を乱し、大切な免疫力の低下を招きます。

医師が、風邪の患者に抗生物質を投与する場合があります。これはウイルス感染で傷ついて抵抗力のなくなった体が細菌に感染して、肺炎や、膿を持った咽頭喉頭炎などを発症している場合で、原因菌に効果のある抗生物質が選択されなければなりません。

インフルエンザをはじめとする風邪ウイルスは様々な症状を引き起こします。くしゃみ、鼻水、鼻づまり、のどの痛み、咳、たん、頭痛、筋肉痛、関節痛、胃腸症状、発熱などです。治療はこれらの症状を抑えて体力の回復を待つことにあります。風邪薬は早期に使用することが病状を進行させないためにも重要です。

市販の総合感冒薬は、鎮痛解熱剤、抗ヒスタミン剤、鎮咳剤、去痰剤、中枢神経興奮薬などを組み合わせ、効果と副作用の軽減を考えて製造されています。市販薬の一回量は医療機関で処方される各症状に合わせた処方量とほぼ同量です。病院の薬の方がよく効くということはありません。市販薬は、緑内障や前立腺肥大症、呼吸器疾患などの持病も考慮に入れて、症状にあった薬を選択することが大切です。また、インフルエンザでは使用を控えないといけない消炎鎮痛剤もあるので、購入時に薬剤師とよく相談しましょう、

風邪症状は通常一週間程度でウイルスに対抗する免疫力が出来て収まってくるものです。

しかし風邪に打ち勝つためにも、また風邪をひかないためにも、日ごろ、栄養、休養に十分配慮し、まず口腔内を清潔に保ち、手洗い、うがい、マスク、などの風邪対策を心がけましょう。

下呂市立金山病院顧問 古田智彦